

2018年9月30日(日)／説教者：座間味宗治

説教：「しまくとぅばと聖書の関わり」

聖書：ヨハネによる福音書1:1～10

ヨハネ福音書 1 章に「初めに言があった、言は神と共にあった」と記されている。これは真の神、イエス・キリスト、永遠の命、人間の生命を意味しています。沖縄のしまくとぅばには「言葉銭遣」との表現がある。しまくとぅばは我々の祖先が暮らしの中から生み出した生活用語であり相互理解を深め助け合う最高の用語、道具である。つまり「言葉銭遣」は言葉使いは金銭同様に大事であり生命線を意味するものである。

さて、沖縄文化とキリスト教文化には地理的、歴史的、文化的背景等に大きな違いがあります。キリスト教が沖縄に入って来たのが 1846 年、宣教師ベッテルハイムによると言われている。1853 年ペルー提督入国によって日本に文明の夜明けが到来し、1879 年〈明治 12 年〉琉球王朝(琉球処分)となりました。そして 1945 年沖縄戦終結、つまり戦後アメリカ従軍牧師や宣教師によってキリスト教伝道が現実的に普及された。しかし我々の先祖が語り残した沖縄文化、「しまくとぅば〈黄金言葉〉」はキリスト教を遥かに遡る沖縄の島の誕生と共に存在している。明らかにキリスト教文化と沖縄文化の歴史的、地域的、文化的思考に大きな相違はあっても多くの類似点があることに驚きを否めません。

そこで沖縄を象徴する言葉に「命ど宝」、「他人助き助き」、「行逢兄弟」について考えてみたい。

琉球国最後の尚泰王は 1879 年明治政府に首里城を明け渡した時、“戦世もしまち、弥世ややがて 嘆くなよ臣下「命ど宝」”を残して江戸のぼりする。黄金言葉には「世は捨てん身(み)や捨んな「命ど宝」とある。同様にマタイ 16 章 26 節には「たとい人が全世界をもうけても自分の命を損しては何の得になるだろうか? また、他人助き助きに関して「世間は互いに助け合って暮らすもの」、マタイ 25 章 35 節には「空腹の時に食べさせ乾いている時に飲ませ旅人であった時に宿を貸してくれた」。行逢兄弟に関しては「見知らずの人と偶然道で出会うと何かの因縁だとして差別してはいけない」。ガラテヤ 3 章 28 節には「ユダヤ人、ギリシャ人、奴隷、自由人、男、女の区別はない」。本当に感謝だ。肝心(ちむぐる)文化が聖書の中に多くの類似点が含まれていることは驚きである。

黄金言葉に“紙切れは朽ちゆん、言葉は朽ちない”、聖書に“天地は滅びるであろう、しかし私の言葉は滅びることはない”。「言葉は朽ちない」と「言葉は滅びない」は兄弟言葉である。我々はしまくとぅばと聖書を同時に学んでいきたいと思う。(座間味宗治)